

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ペルー北高地パコパンパ遺跡調査だより 2006

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008363

ペルー北高地パコパンパ遺跡調査だより 2006

関雄二

(国立民族学博物館教授 アンデス文明研究会顧問)



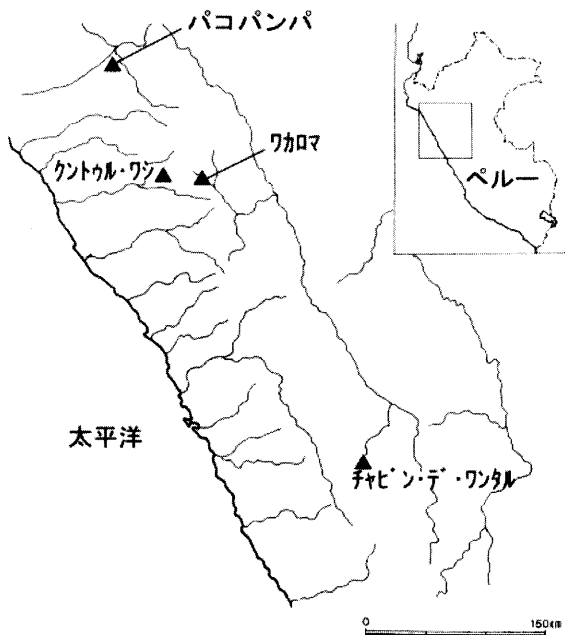
(写真1) 半地下式広場南部で発見された階段（封印されている）

パコパンパ遺跡への道路状況は、例年に比べて非常に悪い。2月まで降らなかった雨が3月から5月にかけて大量に襲い、村までの唯一の街道を徹底的に痛めつけたようだ。その名残からか、調査に入った7月でさえ、降雨により発掘が中断されることがたびたびあった。雨が降るととにかく寒い。乾燥し、晴天が続くような大半のペルーの高地一般とは異なり、アンデスの東斜面、アマゾン源流地帯の大気が谷沿いに流れ込むパコパンパ一帯は、乾季であるこの時期でも雨に見舞われることが多く、植生も豊

かである。

いずれにしても、雨は発掘の敵である。寒さならずとも、発掘区は泥沼と化し、層位のコントロールもままならぬほどになる。器材を運ぶ地元の作業員でさえ、急斜面で足をとられ、転落する悲鳴とそれを囁し立てる同僚の歓声が降りしきる雨の中にこだまする。

パコパンパ遺跡調査の2年目は、2カ月半という十分な期間が与えられた。この間、私とペルー人考古学者ワルテル・トッソ氏、それにプロジェクトのカウンターパー



(図1) パコパンパ遺跡と北部山地の形成期遺跡

トであるペルー国立サン・マルコス大学代表のファン・パブロとアラセリ・エスピノサ両君、それに学生13名ほどで、相当広い範囲を対象とした発掘調査を行った。後半に参加した井口欣也埼玉大学助教授と2名の日本人学生を除けば、ほとんどがペルー人であり、喧噪ともいってよいほどのにぎやかさが支配する日々の生活には、これまで過ごしてきた日本調査団とはずいぶん違う雰囲気を感じた。

「チャスキ」の前々号でも紹介したが、改めてパコパンパ遺跡に触れておこう。パコパンパは、ペルー北高地カハマルカ県北部、チョタ郡、海拔2500mに位置する形成

期の神殿遺跡である。形成期というのは、日本の調査団が過去50年近くにわたって追究してきたアンデス文明初期を指す時期名であり、紀元前2500年から紀元前後がこれにあたる。形成期では、神殿における活動が生業を含めたさまざまな分野と関連しながら社会を築いていたと考えられ、パコパンパもその一つである。しかしながらその規模は、ペルー北高地随一といってもよく、単なる地域統合の核を超える役割を担っていた可能性を秘めている。

遺跡自体は3段の基壇より構成され、100m×200mの最上段（第3基壇とよぶ）には、半地下式広場をはじめとする様々な遺構の痕跡が

認められる。昨年は、小規模ながら、試掘溝を半地下式広場にかかるように設けた。その結果、以前、考古学者らが提示した編年、すなわち二つの時期が存在する点を再確認することになった。しかしながら、時期名については、これまでの名称にとらわれることなく、より中立的にI期（B.C.1300～B.C.900）、II期（B.C.900～B.C.500）と名付けた。とくに、今日、地表から頭を出しているような遺構の大半が、後半のII期にあたることが判明した点は収穫であった。

さて今年の調査の目標は、いくつか存在した。一つは、中途半端に終わった昨年の

試掘溝を再度掘り返し、さらに深く掘り下げ、遺跡の形成やI期の遺構を探ること、さらには、基壇を支える巨大な正面壁にまで試掘溝を拡張し、正面壁の建設時期を同定するとともに、半地下式広場等の遺構との時期的関係を層位的に押さえることである。結果としては、正面壁は、最も古いI期にすでに建設が始まり、II期に修復の手が加わった点がわかった。またこの正面壁によって支えられる第3基壇東端部分の形状も復元できるようになった。さらに現在目にすることができる正面壁は、第3基壇を支える擁壁の一部に過ぎず、その東側には階段状に連なる擁壁が続き、そこには階段が眠っていることもわかった。

もう一つの目的は、この遺跡を有名にしている代表的な遺構である方形半地下式広場において、いまだ発見されていない階段をあと二つ探し出すことであった。すでに過去の調査で、あるいは正確にいうならば、考古学者がこの地に足を踏み入れる前から、広場の東と西に階段があることはわかってきた。しかし、昨年の地形測定の結果、広場の北と南にも低い基壇が隣接することが判明し、そちらへのアクセスとして階段の存在が推測されたのである。ここでもクントゥル・ワシ遺跡での調査経験が生かされた。1988年から15年も調査したクントゥル・ワシ遺跡では、半地下式広場を囲むように基壇が配置され、広場各辺の中央部に階段が設けられ、計4つの階段が確認されている。

しかもパコパンバ遺跡の半地下式広場を構成する壁には、階段の存在を暗示する特徴が備わっていた。広場の壁は丁寧に切り出された石灰岩のブロックより構成され、これが縦長、横長、そして縦長という具合にリズムよく積み上げられている。ところが、南辺の中央部分では、このリズムが崩れ、代わりにだらしない、しかも小型の石列に取って代わられているのである。ここに階段があり、後で封印されたのだと、去年からピンときていた。しかもだらしない石列の幅は、すでに見つかっている階段の幅とほぼ同じである。

実際に発掘を開始して、数日で、この予測を見事に裏付けるような階段のステップが目の前に現れた(写真1)。さらに封印を行った時期の考察も可能となった。どうやら同じII期の後半、この作業が実施されたと考えられる。この階段は不要、あるいは使用してはならないという判断が下されたのだろう。しかし、階段が封印されても窪んだ広場は、どうも利用され続けたようだ。こうした階段と封印の状況は北辺でも確認することができた。

さらに興味深いのは、この広場が、その次、すなわち第3段階として、すっかり埋め尽くされたことがわかった点である。大量の石、土器、石器、銅製品などがおそろしく一気に投げ込まれている。周囲の基壇や部屋を破壊し、その建材や儀礼に使用した用具などが意図的に集められ、封印の材料として使用されたと考えられるのである。



(写真2 上) 中央基壇で確認された部屋状構造
(写真3 下) 地元住民を招待した発掘現場説明会

さて今年の調査目的の3つ目は、広場の西に控える中央基壇を発掘し、その形状を探ることであった。これまで、私が参加してきた北高地の形成期神殿では、ワカロマにせよ、クントゥル・ワシにせよ、パコパンバに匹敵するほど見事な構えをみせながらも、こと肝心な神殿の中核部分に関しては、後代の破壊などを受けて、元来の姿をつかむことができなかったのである。ほとんど外枠の形状を把握するだけであったといっても過言ではない。

それに比して、パコパンバの中央基壇の保存状態はきわめて良好である。長方形の部屋が隣接する同様の部屋と壁を共有しながら連なり、東から西に向かって少しずつ高くなっていた。各部屋の入り口は、半地下式広場の東西の階段中央部を貫く中心軸に沿うように、設けられていた。しかし、東から進んで、最も奥の部屋の入り口だけが北にずれていた。すなわち、最後の部屋だけは、正面から進んでいく訪問者の視界には入らないことになる。この部屋は、神殿のなかでも非常に特殊な機能を持っているため、儀礼参加者らが接近することを避ける必要があったのかもしれない(写真2)。こうした神殿構造へのアクセスの問題は、神官などの権力者の発生などを考える上で貴重なデータとなることは間違いない。

さらに興味をそそられるのは、こうした一連の部屋構造の床下から、同様の構造が出土したことである。神殿更新の痕跡ともいえるが、共伴する土器は異なる。土器な

どの物質文化による変化はあっても、建築のアイデアは連続しているということであろうか。結論は今後の調査に委ねられよう。

パコパンバ遺跡の調査はまだ手をつけ始めたばかりである。まだ2年目だというのに、村人の歓迎度は、驚くばかりである。もちろん、小さな村に40人規模の雇用をもたらすという経済効果もあろうが、村の誇りとしての遺跡をきちんとした形で研究していることに対する敬意の方が大きい。作業員の選抜は、村の会議に一部委ねることとし、リーダーは、生活水準を考慮した上で作業員を選んだ。とはいえ、選考に漏れた人でも、雨で浸食された石彫をどうにかしたいと訴えてくる。彼らの関心は、必ずしも食べることだけではないのだ。依頼してもらえないのに、今年の村の守護聖人祭り(8月30日)のプログラム最終日には、私の誕生日パーティが組み込まれた。長年、調査してきたペルーでもこれだけの歓迎ぶりは経験したことがない。参加したペルー人考古学者、学生でさえ舌を巻くほどである。それだけに、私達が背負う責任はきわめて大きい。発掘最終日の現地説明会に集まった300名もの村人達(写真3)をはじめとして、周辺住民に、目に見えるような形で、遺跡の意味と活用を示す手段を少しずつ考えていく必要がある。2体の石彫に今年取り付けた雨よけの屋根は、ほんのささやかな私達からの感謝の表現にすぎない。